

平成27年度 学校評価総括評価表

徳島県立ひのみね支援学校

徳島県教育基本目標	『とくしまの教育力を結集し、未来を創造する、たくましい人づくり』～県民とともに考え、ともに育むオンリーワン教育の実現～	
学校経営基本方針	「三つの保障」「二つの指導」「一つの約束」 三つの保障：「学習の保障」、「安全の保障」、「人権の保障」 二つの指導：「人間性」と「専門性」の融合、「規律と礼節」 一つの約束：「地域や保護者に開かれた学校」	
本校の教育目標	「徳島県教育振興計画」に基づき、児童生徒一人一人の個性と人権を尊重し、自立と社会参加の促進に向けて、自己実現に努める心豊かな人間を育成する。	
本年度の重点目標	自立と社会参加の促進に向けて、3つの「I」を三位一体で推進する。 1 ICF（国際生活機能分類）の理念に基づく障がい児の理解と啓発の推進 一人一人の児童生徒の実態を把握し、具体的な指導内容を設定する。そして、キャリア教育プログラムの推進を図る。 2 ICT（情報通信技術）の推進による外部の専門家を活用した授業改善 授業の中でICTを効果的に活用し、指導方法の改善を図りながら、児童生徒の学力向上につなげていく。 3 ISO（新学校版環境ISO）の推進を通じたESD（持続可能な開発のための教育）への取組 ESD（Education for Sustainable Development）に取り組む中で、他者・社会・自然環境とつながり、かかわる力を育成する。	
	平成27年度末総合評価	次年度への課題
	1 ICFの理念に基づいて、本校児童生徒の生命・生活・人生において重要と考える「コミュニケーション能力の向上」に焦点を当て、個別の指導計画の充実とPDCAサイクルによる授業実践に取り組んだ。また、総合教育センターの協力を得ながら研修を充実させた結果、「目標設定の妥当性」に関して、学部主事・ワーキンググループ教員を中心に、個別の指導計画支援ツールの試案を作成することができた。 2 本年度の事例報告会等の研修により、身体の動きに困難のある児童生徒に対して能動的な活動を促すために、ICT機器を活用しようとする教職員のニーズを高めることができた。また、ICT機器を授業で使用している具体的な実践事例をデータベース化する取組を本年度は開発することができた。 3 ISOの推進については、新学校版環境ISO推進委員会で計画や活動内容について検討しながら実施することができた。ESDのアプローチの一つとして、学校周辺のごみ拾いの活動を児童生徒・保護者・教職員が協力して実施している本校の実践が評価され、『国際教育オープンフォーラム～高校生による国際支援活動とESD～』で発表できた。	1 今後は、設定場面の指導によって身に付けたコミュニケーション力を生きる力として、学校生活全体や家庭や地域社会で発揮するための般化の指導の充実を図ることが課題である。そのためには、外部の専門家によるコンサルテーション等を活用し、個別の指導計画に般化場面の評価ができるように整備するなどの試行をしながら、般化のための指導計画を教育課程に位置付けていくことが必要である。 2 ICTの推進については、外部の専門家と連携し、身体の動きに困難のある児童生徒の能動的な活動を支援するためのICT機器の活用プログラムを実施する。企画総務課や情報・防災課等が連携して系統的に推進する。特に児童生徒の能動的活動の実態把握や評価シートの試行に重点的に取り組む。 3 ISOの推進については、ISOの活動全般について児童生徒が主体的に取り組める活動を考案するとともに、重度の児童生徒の学習として計画的に導入していく方策を検討し、学校全体で取り組んでいけるようにする。また、より多くの人に呼びかける機会を作り、保護者同士や地域との関わりを広げられるように検討する。

重点目標 1 ICF（国際生活機能分類）の理念に基づく障がい児の理解と啓発の推進					
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策
○自立と社会参加となるコミュニケーションについて、一人一人の児童に育てたい力や課題を明らかにし、個別の指導位置が指導方針や方向性を共有する必要がある。	○教員間の共通理解を図りながら、コミュニケーション力を育て、生活の中で活用させる。 [I 類型] ・困った時など、必要なことや自分の意思を伝えるコミュニケーション力を育てる。 [II～IV 類型] ・一人一人の児童生徒に合わせたコミュニケーション力を育てる。	<p><活動計画></p> <p>① 全児童生徒について学期に1回ケース会を実施し、教員間の共通理解を図る。</p> <p>② コミュニケーションに関する指導や支援機器等の研修を年3回以上行う。</p> <p>③ コミュニケーションに関する実践について、学部会で年3回以上情報交換を行う。</p> <p>④ 個別の指導計画のコミュニケーションに関する目標設定の妥当性を高める研修を、学部主事やワーキンググループを対象に実施する。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>① 児童生徒一人一人のケース会を学期に1回ずつ実施し、コミュニケーションの目標や指導の手立てについて話し合った。</p> <p>② 7月に校内の情報担当者を講師にICTを活用したコミュニケーション支援の希望研修会を4回実施し、8月に外部講師を招いた肢体不自由児のコミュニケーション支援に関する研修会を1回、校内教員によるコミュニケーション評価の研修会を1回実施した。</p> <p>③ 小中学部の全職員で1回コミュニケーションに関する目標や指導の手立てについて共通理解を図り、指導体制を整えた。その後は、学部別のケース会を中心に、学期毎の評価等について情報交換を2回行った。</p> <p>④ 個別の指導計画の目標設定の妥当性を高めるための研修を、演習形式で実施した。6・7・8月には学部主事・ワーキンググループ他、校内の希望する教員を対象として、10月には全教員を対象とした。</p>	<p>総合評価</p> <p><評定></p> <p style="text-align: center;">A</p> <p>-----</p> <p><所見></p> <p>児童生徒一人一人に応じたコミュニケーション力を育てる指導については、個別の指導計画に基づきながら指導の充実が見られた。特に、I 類型の指導においては、校外にコミュニケーションの場を設定する等、地域社会で活用できることを意識して、般化場面に指導計画に位置付けて取り組んだ。</p> <p>II～IV 類型においては、児童生徒の実態から身近な教員とのコミュニケーションが中心であった。今後は、保護者や隣接する総合療育センターと協働しながら、家庭や地域社会で活用できるコミュニケーション力を育てることが必要である。</p> <p>コミュニケーションを含めて児童生徒に身に付けさせたい力や育てたい力が見通しやすい指導計画や支援計画のあり方を検討することが必要である。</p>	<p>今後は、身に付けたコミュニケーション力を学校生活全体の中で活かしながら、家庭や地域社会に般化する指導が課題である。そのためには、児童生徒の実態や目指す姿に基づきながら、どのようなコミュニケーション力を獲得させたいか、そのための指導方法について個別の指導計画を充実させながら、般化のための指導計画を教育課程に位置付けていくことが必要である。その際には、今後も外部の専門家のアドバイスを活用しながら進めていきたい。</p>

	<p><評価指標></p> <p>① 各児童生徒のコミュニケーションに関する個別の指導計画の目標で「目標に十分達した」、「目標に達した」という評価を80%以上得る。</p> <p>② 学部主事やワーキンググループの教員の90%以上が、児童生徒のコミュニケーションに関する目標設定や評価について、妥当性を高めることができたと回答する。</p>	<p><評価指標の達成度></p> <p>① 2学期末までのコミュニケーションに関する個別の指導計画の目標の「目標に達した」以上の評価は、全校において87%得られた。</p> <p>② 「研修を活用して目標設定の妥当性を高めることができたか」という質問に対して、学部主事・ワーキンググループ教員計8名の回答はそう思う7名(87.5%)、あまり思わない1名(12.5%)であった。</p>		
--	--	---	--	--

* 「評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった

重点目標2 ICT（情報通信技術）の推進による外部の専門家を活用した授業改善					
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策
<p>○ ICT機器を授業で活用したいと考えている教員が多いものの、実際に活用するまで至っているとは言い難い。(昨年度評価より)</p> <p>○ 児童生徒の実態把握としてOAKプログラムを活用してみたいという声が上がっている。(昨年度研修会より)</p>	<p>○ ICT機器の積極的な活用を推進し、授業改善を図る。</p>	<p><活動計画></p> <p>① OAKプログラムを活用した、児童生徒の実態把握についての研修・事例発表等を年間3回以上実施する。</p> <p>② e-ラーニング等を利用して、ICT活用に関する自己研修を年間3回以上行い、その活用法について考察する機会を設ける。</p> <p>③ 授業への活用を推進し、活用事例を5件以上データベース化する。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>① 6月にOAKプログラムについての研修会、12月にOAKプログラム中間報告・研修会した。3月に事例研究報告会を実施予定である。</p> <p>② e-ラーニングを活用した自己研修としては、「ICT活用について」、「ICT機器ってなに?」、「授業での活用について」である。</p> <p>③ 授業への活用推進として、校内研修等を行った。活用事例のデータベース化は、企画総務課で推進している「教材教具のデータベース」を活用した。</p>	<p>総合評価</p> <p><評定></p> <p style="text-align: center;">B</p> <p>-----</p> <p><所見></p> <p>ICT機器を活用した授業実践に焦点を当て始めたOAKプログラムであったが、児童生徒の実態を把握することの重要性を再確認することとなった。</p> <p>OAKプログラムの活用だけではなく、記録媒体としてiPad・デジタルビデオカメラの活用という従来の記録媒体の活用を十分に推進することが難しかった。しかしながら、研修等を行</p>	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ICT機器を活用した、児童生徒の実態把握を実施し、データを活用した授業実践を行う。 ICT機器を活用した実態把握を基に、児童生徒の変化を評価できるシートを作成する。 情報・防災課のみ単独でデータベース化するのではなく、校内各課と連携して、シンプルで活用できるデータベースを作成する。

	<p><評価指標></p> <p>① 研修・事例発表を3回以上実施する。</p> <p>② 自己研修を年間3回以上実施する。</p> <p>③ 事例を5件以上データベース化する。</p>	<p><評価指標の達成度></p> <p>① 研修・事例発表としては、「OAKプログラムについて」、「OAKプログラム中間報告」、「OAKプログラム事例研究報告会」の3回である。</p> <p>② 校内ネットワークを活用し、アンケート形式・e-ラーニングを年間3回実施した。</p> <p>③ 2月時点では、4件である。</p>	<p>っていくことにより、今までは「ICT機器の使用やその活用方法に関しては難しい」といった感覚を持っていた教員もやってみようという行動が現れてきている。</p> <p>事例のデータベースに関しては、本年度、企画総務課が作成した「教材教具のデータベース」を活用した。このデータベースには、ICT機器を活用した事例が含まれていることから、校内での課の連携を十分に行って、より効果的・効率的に活用できるものを作っていく必要がある。</p>	
--	---	--	---	--

* 「評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった

重点目標3 ISO（新学校版環境ISO）の推進を通じたESD（持続可能な開発のための教育）への取組					
自 己 評 価				学校関係者評価	次年度への課題
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評 価	学校関係者の意見	今後の改善方策
○新学校版環境ISOの活動を推進する必要がある。	① 新学校版環境ISOの活動の推進と見直しを実施する。	<p><活動計画></p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を実施し、計画や活動内容について確認・協議する。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を実施する。</p>	<p><活動計画の実施状況></p> <p>①-1 4月3日、11月2日に新学校版環境ISO推進委員会を実施した。2月にも今年度の反省と次年度の内容について実施予定である。</p> <p>①-2 9月に管理職による内部評価を行い、12月に県教委へ提出した。</p>	<p>総合評価</p> <p><評定></p> <p style="text-align: center;">B</p> <p>-----</p> <p><所見></p> <p>学校版環境ISOは7年目の活動となる。今年度は学校周辺のごみ拾いの活動へ、多くの保護者の参加があった。また、校内の環境整備として、隣接するみなと高等学園と協力して花を増やすことができたり、生徒同士の交流もできたりして有意義な活動であった。</p> <p>課題については、リサイクル活動として回収したペットボトルキャップの送付先の検討がある。昨年度までの送付先が回収中止とな</p>	<p>リサイクル活動についてはペットボトルキャップの送付先のみがつけば、そのまま継続したい。そうでない場合は内容を変更してリサイクルの活動を実施したい。</p> <p>ISOの活動全般については児童生徒が主体的に取り組めるような活動を考えていきたい。そのために、児童生徒それぞれの実態に応じてできることを考え、活動内容を提案していきたい。</p>
		<p>②-1 ベットボトルのキャップ集めのリサイクル運動を、保護者と連携して実施する。</p> <p>②-2 学校周辺のごみ拾いの活動を集まりやすい時間に設定し、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施する。</p>	<p>②-1 5月にキャップを集める趣旨の案内を保護者宛に配付し、通学生を中心にリサイクル活動を実施している。</p> <p>②-2 6月の参観日の3校時、ごみ拾いを一斉に実施をした。86名が参加できた。（一昨年度は56名）</p>		

<p>③ 地域と協力した校内環境づくり</p>	<p>③ みなと高等学園の生徒と本校生徒が協力して花を植える等の校内環境整備を実施する。</p> <p><評価指標></p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を学期に1回実施し、計画や活動内容について確認・協議する。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を年2回(9月・2月)実施する。</p> <p>②-1 ペットボトルのキャップ集めのリサイクル運動で、毎月5kg以上を回収する。</p> <p>②-2 学校周辺のごみ拾いの活動を各学部で年2回以上、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施する。</p> <p>③ みなと高等学園の生徒と校内環境整備を年2回以上実施する。</p>	<p>③ 5月20日、6月24日、11月13日に、両校の生徒達が協力して、マリーゴールド、サルビア、パンジー等の花の植栽を実施した。</p> <p><評価指標の達成度></p> <p>①-1 4月、10月に実施した。3学期には2月に実施予定である。</p> <p>①-2 9月の内部評価では客観的な評価ができ、改善点が見えてきた。次年度の取組については、2月に検討予定である。</p> <p>②-1 5kg未満の月もあったが、平均して月5kg以上を回収できた。</p> <p>②-2 各学部において2回実施することができ、達成した。</p> <p>③ 3回、みなと高等学園の生徒と本校生徒が協力して花の植栽を実施した。</p>	<p>ったため、集めたキャップをどのように送るか、もしくは違う内容でリサイクル活動に取り組むか等を検討し、次年度の活動につなげていかなければならない。</p>					
-------------------------	--	---	---	--	--	--	--	--

* 「評定」の基準 A：十分達成できた B：概ね達成できた C：あまり達成できなかった D：全く達成できなかった